

「第 50 回 生物物理 若手の会 夏の学校」に参加して

北海道大学大学院生命科学院博士課程後期 3 年 喜多 俊介

夏のうだるような暑さの中，バス停から 20 分間歩くとその建物は現れた．第 50 回生物物理若手の会夏の学校が開催される，尾西グリーンプラザ（愛知県一宮市）である．尾西グリーンプラザは講堂・食堂・多目的ホールを備えた 5 階建の宿泊施設で，窓外には木曾川が悠々と流れ，遙かかなたには養老山や伊吹山を望むことができる．まるでどこかの避暑地にでもやってきたかのようなようだった．最高のロケーションで，記念すべき第 50 回の夏の学校が始まった．

今回の夏の学校は大沢文夫先生の特別講演に始まり，1 日目は研究のから騒ぎ 2010，夕食後にはグループディスカッションが開催された．2 日目，3 日目は日中が講義で夜はポスター発表と懇親会がそれぞれ開催された．4 日目は白井哲哉先生と北田貴義先生によるクロージングセッションが行われ，午後 1 時に閉校式となった．参加者には発表の場として，グループディスカッション，フラッシュトーク，ポスター発表の時間が設けられていた．私は 2010 年 9 月 23 日に開催予定の「ひらめき☆ときめきサイエンス」のチラシとポスターを持参し，活動内容について紹介した．他の参加者とはアカデミックにおけるアウトリーチ活動の重要性について有意義な意見交換を行うことができた．

「こういうものは，(基本的に) 参加するものなのだよ．」これは夏の学校に参加していた，別のラボの学生が担当教官からかけてもらった言葉である．今回私が夏の学校に参加して最も痛感したことは，自分が多少無理矢理にでも後輩を誘ってこなかったことに対する後悔であった．夏の学校にはポストドクから学部生まで，若手研究者とはいっても幅広い年齢層の研究者が参加している．そんな若手の会で今回は，修士課程の学生の参加者が目についた．彼らは積極的に質問をし，自分の研究を発展させることに意欲的で，夜の自由討論会（飲み会）でも最後まで残って議論に参加していた．同年代の目的意識の強い仲間との交流は，きつととても良い刺激になると思う．これは実際に参加して寝食をともにしてみないとどうしても得られない部分である．

さて，最後にこれからの夏の学校に期待することを書いてみたいと思う．夏の学校の問題点の 1 つに座学が多すぎるということがあると思う．参加者は深夜まで熱い議論を交わし寝不足となっているため，折角の面白い講義でもいつしか舟をこぐことになる．そこでこれからの夏の学校では，参加型のイベントを増やしてみてもどうだろうか．例えば簡単な実験やクイズ形式の講義，地元の博物館見学なども良いかもしれない．また，他の学会との共同開催や外国の若手の会との共同開催なども期待したい．

最後になったが，今回の夏の学校は日本生物物理学会北海道支部に資金面の援助をして頂いて参加することができた．この場を借りて感謝を述べたいと思う．